トランジット時代の

いきがい考座

パワフルな女性たちが、日本を変える

大阪には年代を問わずパワフルな女性が多い。15年前に「熟塾」という名の学習サークルを立ちあげ、地道な活動を続けてきた原田彰子さんもそのひとりだ。「熟塾」とは幕末に緒方洪庵が大阪でつくった「適塾」の名をもじったもので、その精神を受け継ぎ、誰でも自由に楽しく学べる学習の場を目指している。

〝じゅくじゅく〟という名前から最初、熟年向けの塾と思い込んでいたが、原田さんの話によると命名者は作家の藤本義一さんで、「熟する塾に」との思いがこめられているという。

原田さんは大阪・船場の商社に今も現役で勤めている。大学在学中から生涯学習に関心を持ち、中国の留学生に日本語を教えるボランティア活動の傍ら、神戸の学習サークルに参加。やがて、その中心メンバーとして活躍するまでになる。だが、アフター5まで肩書きがものをいう男性中心の運営に抵抗を感じ、いつか自分の理想の学びの場をつくりたいと夢をあたためてきた。卒業後、会社勤めをしながら少しずつ準備を進め、平成6年に念願の「熟塾」がスタートした。「お仕着せでない、手作りの講座」をモットーに、「介助犬シンシア」「朝鮮通信使饗応料理」「小泉八雲」「文楽」「大阪産ワイン」「なにわの伝統野菜」など、多彩なジャンルの講座やイベントを月1回の割合で開催。時にはまち歩きをしたり、バスツアーで松江や琵琶湖の湖北に足をのばしたり、老舗の料亭で食事を楽しんだりと、毎回趣向を凝らしている。

講座の企画から講師の依頼、チラシの作成、当日の運営と活動記録「熟塾瓦版」の作成まで、ほとんど原田さんひとりでがんばっている。その情熱と行動力で人間国宝の文楽の大夫、竹本住大夫（すみたゆう）さんまでゲストに引っ張り出し、平成16年に、〝旺盛ないちびり精神〟で「なにわ大賞」も受賞した。

「物やお金は分ければ減るが、感動は分ければ増える」が、原田さんの持論である。感動をともに語り、ともに楽しく学ぶ場を提供することをライフワークに、平日は夜遅くまで残業をこなし、週末や休暇をフルに生かして活動を続けている。会員は現在、20代から80代まで約80人。講座やイベントにはだれでも自由に参加できる。

原田さんと出会ったのは、私が今の職場に来てからだが、話をするうち共通の知人がいることがわかった。私が新聞社でデスクをしていた頃、部下だった女性記者で、彼女は男女雇用機会均等法が施行された年に入社した〝均等法第一期生〟でもあった。同業他社の記者と結婚後、共働きで仕事を続けていたが、相手の東京転勤による別居生活がうまくいかず離婚。でも、彼女は少しもめげずに、その後地方支局への転勤を希望して、現在は島根県内の通信部記者として元気に活躍している。

考えてみれば、ふたりとも今流行の〝アラフォー〟（40歳前後）と呼ばれる年代だ。人生の折り返し地点を少し過ぎた彼女たちのパワフルな生き方を見ていると、仕事人間の男たちに負けまいと、肩肘はってがんばってきた私たちの世代と比べ、はるかに自由でのびやかに複線型の人生を楽しむ女性たちが日本でも育っていることがうかがえ、うれしい反面、ちょっぴりうらやましい思いもある。

大阪府立文化情報センター所長
音田昌子
大阪大学文学部卒業後、読売新聞大阪本社に入社。文化部、婦人部記者を経て編集委員に。定年退職後、2002年から大阪府立文化情報センター所長。